

平成 30 年 3 月 28 日（水）～30 日（金）

## ないじえる芸術共創ラボ 古典インタプリタ日誌 長塚圭史さん WS 俳優・ダンサーとの挑戦

3 月 28 日（水）から 30 日（金）にかけての 3 日間、国文学研究資料館において、AIR・長塚圭史さんのワークショップが行われました。

長塚さんは、2017 年の夏頃から国文研に来館され、レクチャーを受けたり、教員と話し合ったりしてこられました。このワークショップは、長塚さんが当初から抱いておられたご関心と、「ないじえる芸術共創ラボ」の中で考えられたこととを、どのように演劇、あるいは戯曲に落とし込むことが可能なのかを探るために企画されたものです。

ご参加くださった方は以下の 8 名です。（50 音順）

坂本慶介さん

菅原永二さん

成河<sup>そんは</sup>さん

高木稟さん

引間文佳さん

藤間爽子さん

八十田勇一さん

李千鶴さん



俳優、ダンサーなど、様々な経歴を持つ個性的な皆様は、今回の WS 開催にあたり、長塚さんが特に信頼し期待を寄せておられるメンバーだそうです。

平成 30 年 3 月 28 日（水）～30 日（金）

このワークショップには、古典インタプリタの私、有澤も中に入れていただき、一緒に身体や頭を動かしました。

普段の立ち位置とはかなり異なり、この記事もどう書いたものかと悩ましいのですが、すべてが新鮮で刺激的だったため、是非その感覚を共有したく思いました。

そこで、客観性を欠くとは思いますが、WSに参加した私の視点からお届けしたいと思います。

### 【WSに飛び込む】

28日の午後、皆さんが来館され、まずは身体と頭のウォーミングアップを行うとのこと。

皆さんが参加しやすい雰囲気を作ってくださいなかで、私もそのなかに飛び込んでみることにしました。

たとえば、二人組になって、一人が鏡役になるというもの。ダンサーの引間さんがお手本を示してくださいました。

一人は指示を出さずに様々な動きをし、鏡役は相手の身体がどこから動いているのかにまで注意し、そっくり真似てゆきます。

相手の身体の可動域に追いつけないと成り立たない鏡役……難しいと思っていると、案外指示役も難しいもので、次の動作が全く思いつかないのです。周りを観察してみると、みなさん立ったり座ったり寝そべったり、ユニークな動きをしておられ、自分が普段いかに決まった動きしかしていないのかに気付かされました。



平成30年3月28日(水)～30日(金)

全体の様子を見ておられた長塚さんと引間さんからは、「相手がついて来られるように、予想外の動きをしないこと。サインを出してあげる」とアドバイスがありました。確かに、指示役が一人だけで行えるものではないので、二人の協力、特に指示役の思いやりが必要なのです。

この「サインを出してあげる」というアドバイスは、ワークショップで試みた即興劇のなかでも非常に重要なものとなります。

それにしても、国文学研究資料館や古典籍といった言葉からは、おそらく誰も想像し得ないものが繰り広げられている……しかも自分もそのなかに飛び込んでいる……と、ワークショップ冒頭から静かに衝撃を感じていました。

### 【長塚さんのご関心—肉体性と時間軸—】

長塚さんは、「ないじえる芸術共創ラボ」記者発表で行った座談会(2017年10月18日)<sup>1</sup>の時から、古典籍をひらく動作自体にドラマを感じると話しておられ、古典籍をひらくところから、その本が持っている時間軸が立ち上がるような戯曲が作れたら、と仰っていました。

#### 〈古典籍と肉体性〉

古典籍は、当然のことながら和紙で出来ており、現代の洋装本に較べると、随分柔らかいものです。しかも劣化している場合が多いため、

- ・端を持ってめくる(冊子本)
- ・肩幅までしかひろげない(卷子本)

など、ルールにしたがって注意深く扱います。

我々研究者は、馴れてしまっていて自然に行っていることも多いのですが、長塚さんは、研究者が古典籍をひろげる動作をご覧になり、大変興味深く感じられたそうです。

#### 〈古典籍と時間軸〉

もうひとつのテーマは時間軸です。

国文研にはたくさんの古典籍が所蔵されていますが、当然のことながら、それらはひとつひとつ、様々な人たちの手を経て当館に収められたものです。大事に受け継がれてきたもの、売買されたもの、拾われてまた読まれたもの……古典籍の辿ってきた時間軸を遡ると、さまざまなドラマを内包しているのに気付かされます。

また、成立にまつわるドラマもあります。

古典籍の大きな分類として、写本(手書き)か刊本(印刷物)かという違いがあります。

---

<sup>1</sup> <http://www.nijl.ac.jp/pages/nijl/symposium/index.html>

平成 30 年 3 月 28 日（水）～30 日（金）

写本の場合、たとえば『源氏物語』を読みたい人は、それを持っている人から借りて写していたのです。そのためどのような紙に、どのような字で書くかということが非常に重要視されましたし、紙等の価値や手間の多さから、本は財産としても非常に大切にされてきたのです。

そこで重要になるのが、誰から借りたのかということ（伝来）です。大抵由来のある本には、最後の部分に「いつ、誰が誰から借りて写したのか」という情報が書かれています。この部分を「奥書」と言いますが、どういった経緯でその本を筆写したのか、あるいはその本を作った目的のようなことも書かれていることがあります。こういった奥書を調べることで、その本が過ごしてきた時間を辿ることができます。

また、版本も多くの人の手を経て来ています。たとえば曲亭馬琴『南総里見八犬伝』は、板木から刷られた印刷物ですが、作者である馬琴が原稿と絵の下書きを書き、絵師が絵の清書を、筆耕が文字の清書をし、彫師が板木を彫り、摺師が絵の具を付けて刷り、表紙を付けて糸で綴じてから、本屋に並んだり貸本屋が扱ったりするようになるのです。

長塚さんは、写本には大事にされてきたドラマが、版本には多くの人に関わる騒々しいドラマがあると感じられたそうです。

このワークショップでは、比較的道筋が辿りやすいだろうというご判断から、版本のドラマに注目してゆくことになりました。

ひとつの古典籍が自分の手元に来るまでに、誰が、どのように関わっているのか。そのことを探り、ドラマをちりばめることによって、古典籍の持っている時間軸を旅するような戯曲ができるのではないかと話してくださいました。きっとそのことは、あらゆるものが、それぞれ時間を含んでいるのだという普遍的なテーマに繋がるだろうということです。

### 【古典籍との出会い】

さて、長塚さんはこれまで国



平成 30 年 3 月 28 日（水）～30 日（金）

文研に足を運ばれ、古典籍に親しんでおられますが、ご覧になるのが初めてという方もおられるだろう、ということで、色々な種類の古典籍を用意していました。

奇妙で愉快的妖怪たちが描かれる『百鬼夜行図』（国文研蔵、請求記号：ヨ 3-25、<https://kotenseki.nijl.ac.jp/biblio/200016403/viewer>）や、

大部の源氏物語注釈『湖月鈔』（国文研蔵、請求記号：鶴飼 96-20-1～60、<https://kotenseki.nijl.ac.jp/biblio/200018258/viewer>）など、様々な形態・内容の古典籍をひろげたところ、皆さんが興味深そうに身を乗り出してご覧になっていたのが印象的でした。手触りを確かめたり匂いをかいだり……五感を使って古典籍に親しんでおられました。

そして、書庫に収蔵される板木<sup>2</sup>もご覧いただきました。

国文研に所蔵される板木はいくつかあるのですが、特に「合巻」とよばれる江戸時代後期の絵入本の板木<sup>3</sup>は、画面全体にびっしりと刻まれた細かな絵と文字が圧巻で、皆さんが特に関心を持っておられました。この板木は、前の持主か誰かが裏を彫って使っていたらしく、お盆の形で残っているのです。板木が辿って来た運命にも惹かれていたようでした。



と

ころでこ

のワークショップには、当館の教員も何人か参加しています。適宜、出納している資料についてご説明いただくのですが、（私も含めて）研究者というのは資料について語っている時

<sup>2</sup> 江戸時代後期の印刷は、多くは板木に墨をのせて刷る「製版印刷」で行われました。その技術は段々と精密さを増し、豪華な多色刷りの浮世絵などを生み出しましたが、明治以降活版印刷が主流になったことから、板木は破棄されるものも多く、今では印刷物と照らし合わせて見られるものは貴重な存在です。

<sup>3</sup> 請求記号：ヲ 9-11-1～2

平成 30 年 3 月 28 日（水）～30 日（金）

に一番生き生きするもの……その様子が印象深いという感想もいただき、苦笑した私たち  
でした。研究者コミュニティにいると気付けないことですね……。



【本を読む動作とは？—ここにはない本から人の身体まで—】

平成 30 年 3 月 28 日（水）～30 日（金）

### 〈ここにはない本を想像する〉

さて、車座になり、長塚さんから「本を想像してみよう」と指示がありました。各々が本を思い浮かべます。

続いて「それを手に取ってみて」「本を持って歩いて」という指示。

長塚さんは様子をご覧になり、一人一人に「どんな本だった？」と聞いてゆかれます。

みなさんが想定している本の形や色、内容を聞くのは大変楽しいものでした。

たとえば「大きな本で緑の表紙」だとか「時代小説」だとか「古い本（内容はわからない）」だとか。なぜその本を思い浮かべられたのでしょうか……。ちなみに私は、鈴木俊幸氏の『江戸の本づくし』（平凡社新書、2011 年）を思い浮かべていました。大学で卒業論文を書く時に購入した本で、今でも大学で授業をする際に大変お世話になっている、愛着のある一冊です。



### 〈“読む”ってどういうこと？〉

ひたすら“読む”という行為を追求するために、本を読む人を演じ、その本を読むという行為を次の人が奪ってゆくということにチャレンジすることになりました。

読む姿勢や、奪い方は色々あっても良いが、本はなるべく大切に扱いましょう、というルール。

皆さん、前の人の動きをじっくり観察しながら、かわるがわる空間へ入ってゆかれます。出入りの柔軟さはさすがで、前転しながら押し出したり、同じ本を一緒に読みながら入れ替わったりしてゆかれます。読み方も様々で、寝転んだり座ったり歩いたり、本を床に置いていたり、持ち上げたりと、“読む”という行為にも多くのバリエーションがあることに気付かされます。

そのうち長塚さんから、本を読む人が一人ずつ交代しているところを、もっと沢山の人が関わっていくと面白い、という声が掛かりました。他にもどんな本を読んでいるのか、サイズ感位は意識できると良い、途中から本が逆になってもいいし、取られた本に執着する人がいてもいいし、というアドバイス。

平成 30 年 3 月 28 日（水）～30 日（金）

この提案をふまえて、皆さんは先程よりも自由に振る舞い始めました。

たとえば本を奪うタイミングで本を扱う動作を大きくすることで、巨大な本を登場させたのは八十田さん。そしてそこへ飛び込む高木さん。大きな本をみんなで読むシチュエーションを作ったり、巻物を広げるそばから巻き戻してゆく人がいたり。そうかと思うと、人の身体を巻物に見立てて転がしたり、あるいは、本を設置する台になる人がいたり。

本の形態も、人との関わり方も、どんどん自在になってゆきます。



### 〈読む人と読まれる人〉

さらに「読む」という動作を拡大し、突き詰める試みは続きます。

「人の身体を読むには、どうしたらいいんだろう」。

長塚さんのこの問いから、身体をつかった試みが始まりました。

まずは一対一で、本に見立てた一方の人の腕や背中を丹念に見てゆくところから始めます。指を一本ずつ見てゆく人、転がしてみる人……

そしてその試みについて、皆さんから様々な意見が出されました。

たとえば、読まれる人はどのような佇まいでいれば良いのか。

本ならば、自分でページをめくって続きを読ませることはないので、あまりに協力的だとおかしいのかもしれない。しかしその逆で、実在している人間を読むということは、もしかすると読ませたくないという抵抗することもあるのかもしれない。

また、「連れて歩くのもありだね」とおっしゃる長塚さん。引間さんが、本役の八十田さんを連れて持ち運び、場所を変えて読んだのが面白かったそう。確かに文庫本なら連れて歩けるのです。本になった八十田さんは、引間さんに持って歩かれて一緒にベンチに座っていて、読まれるときだけちょっと身体を傾けたりする、といった風情でした。

あるいは電車の中で読まれることもあるでしょう。本は席をゆずることもできて、違うポジションから、座っている人に続きを読ませるのです。

平成 30 年 3 月 28 日（水）～30 日（金）

また、本になっている人の佇まいによって、その内容が自ずと想像される……という一場面もありました。

本を読むということだけでなく、読まれる側がどのような振る舞いをするべきかを考えたり、動作を拡大したりすることによって、本を読むという行為を虚心坦懐に見つめることができました。

また、私にとって新鮮だったのは、皆さんがそれぞれシチュエーションを作り込んで動作に入られること、しかも前の人とどう関わるか、あるいは他の人がどのように入れるようにするかという発想が非常に柔軟で、周りをよく観察したり、タイミングを作ったりしていることでした。面白い関わり方をどんどん考え出してゆかれると同時に、現実を超えた本の存在を創り出してしまいう力にも、大変驚かされました。

それにしてもこの時点では、この行為がどこへゆくのか、全く想像がつきません。



【図書館のひとびと】

平成 30 年 3 月 28 日（水）～30 日（金）

次の試みは、「図書館にいる人々」になってみるというものでした。

当然のことながら、図書館という空間はそれぞれが設定するしかありません。それどころか、自分が誰で、どんな理由で来ているのか、どのように過ごしているのかも、考えてゆかなければなりません。

さらに、「別の人の動きに関わってみよう」という課題も。「乗っかって、真似しちゃってもいいし、なんとなく一瞬そうなるでもいい。そしてそのままなんとなくまた離れていく、っていうのをやってみよう」。

この提案に、どう乗ればいいのか……長塚さんの説明を聞きながら、自分のキャラクターを設定することも、私はなかなかできません。ましてや人と関わってゆく??想像がつかないまま、「じゃあ、始め」という声が掛かりました。

### 〈1回目の挑戦〉

まず動き出されたのは、若手の坂本さん。書棚から目当ての本を見付けようとしているようです。だんだんと、様々な本棚から本を探す人々が登場し、見付けては思い思いの椅子に座って読書にふけているようです。

ほかにもカウンターで本を借りる人、同じ本に手を伸ばしてしまっ気まづくなる人……図書館で見覚えのある人々の動きが、目の前で繰り広げられます。

その中で菅原さんは、ご自身のリュックサックを背負い、国文研の入館証を首から掛けて登場。本を読むでもなく、なぜか淡々と椅子（キャスター付き）を押しながら書棚の間を歩いておられます。

菅原さんは一体……と思いつつ、私は自分が高校生の時に通っていた図書館をイメージしながら、“勉強に来ていたけど、途中で飽きて本を眺め始める人”になることにしました。

これで全員が図書館にいる人になりました。本を読んでいる人に話しかける人、人が座っている椅子を動かす人、携帯電話が順番に鳴り出す人たち、同じタイミングで笑い始める人たち……皆さん打合せをしたわけではないので、周りの人がどんな人になり切っているのかを観察し、絡み方を考えてゆかれます。段々とよく分からない世界が出来てきました。

圧巻だったのは成さん。なぜか椅子の上に立ってくるくと回ったり、腹ばいになり部屋の中を行ったり来たりしています。どんどん自分の振る舞いが分からなくなってきた私は、つられて椅子の上に立ってみましたが、正直なところ意味が全く分かっていません。

そのうちお年寄りが二人出てきて、その家族も登場し……というところで、いったん一区切り。観察されていた長塚さんからのコメントと、皆さんがどのような人物になっていたのかをうかがう時間を設けました。



### 〈空間をつくること、人物を設定すること、リンクすること〉

長塚さんは、「段々ところが図書館なんだ、と分かっていくのが面白い」とおっしゃいました。

たとえば、淡々とした菅原さんの動きは図書館の人だったそうです。私は「図書館にいる人」という設定から、来館者しか思い浮かべていなかったのですが、確かに職員でも良いのです。図書館の人がいる場所に、色々な人が登場して通り掛かることによって、だんだんとそこがどこなのか、ということが分かるという点で効果的だったそうです。

後で思い返すと分かるのですが、初見ではその発想がなく全く思い至らなかった私……皆さんの中には確実に「図書館にいる人」がイメージされていたのだなあと感じました。

また、「椅子に座る」という行為についても言及されました。

座って本を読んでいる人を観ていると、読んでいるのか読まれているのか、なんだか分からなくなってくるような、人物が本になっているような感覚があったそうです。でも、人が座っている椅子を押して移動させることによって、車椅子に乗っている人なのかな、と思ったり……観る側に揺さぶりをかけるものだったそう。

人とリンクする、ということは、私には難しい課題です。

前述のように、私は途中から皆さんの動きにリンクしようとして吞まれてしまい、自分の読書に戻れなくなっていました。長塚さんからは「そろそろ図書館から帰りたくなる時間は確かに経験するので大切だけど、最後どうやって読書に戻っていくのか、借りる、探すので終わりじゃなく、読むところに戻る人がいてもいい」というアドバイスが。

しかし人とリンクすることによって、キャラクターが変わってしまった人もいたようです。

平成30年3月28日（水）～30日（金）

たとえば、高木さんは彼女を待っているつもりだったのに、藤間さんから「お父さん」と呼ばれてしまったので「お母さんを待っていることにしよう」と思われたそうです。

その藤間さんも、最初大学生のつもりで過ごしていて、高木さんのことを「お父さん」と思ったのですが、最終的に出てきたおばあさんに話しかけることで、「あ、自分ももっと年上だった」と思い直したそうです。

このように、時間が経過するなかで「あ、そういうことだったんだ」と自分で思う、ということとは、演劇のなかでままあることだそう。

これを聞いておられた長塚さんは、「私は誰でしょう」の時間をもっと大切にしたい方が良いかもね」とアドバイスをしてくださいました。

先程の取り組みでは、全員が入ってきた時と終わる時とで違う人になっていました。キャラクターが転換してゆくことは勿論良いのだけれども、一度登場させた人が、必然性なくその場からいなくならないように、存在感を保って欲しいとのこと。存在感とはどのように出すものなのか……私にはまだ理解が及んでいませんが、皆さんは各々受け止められたご様子。

私がこれまで触れることがなかった言語で共有されている世界がある……と衝撃を受けました。

ところで、大変自由に身体と椅子を使っておられた成さんは、はじめ若冲の生涯が書かれている本や画集を見ていたが、夢中になっていって無邪気に楽しんでいたそう。身近な図書館の“リアル”だけを追求しなくても良いのです。

“リアル”といえば、この様子を見ておられた野網摩利子先生（当館教授）から、「皆さんは本を重たい洋装本のように扱っておられるけど、有澤さんは軽い和装本を持っているみたいでした」という鋭い指摘がありました。全く意識していなかったことですが、自然と、本の扱いが和本のそれになっていたのでしょうか。確かに、空間は一つだけでなくともよく、江戸時代の図書館（のような場所）が紛れていても良いね、という話も出てきました。

この話をふまえ、もう一度同じ事に挑戦することになりました。

次の挑戦では、最初になっていた人物から「後ろめたくなく」役を転換できるように、最初にいたキャラクターを放棄せずに存在させ続けることに加え、リンクの方法がそれぞれ違って良いということ（思いっきり切り替えるのか自分を守るのか、あるいはずっと自分の世界に入っていた人が急に一瞬リンクして、また戻ることがあっても良い）を意識することが課題です。

## 〈2回目の挑戦〉

2回目のチャレンジの段になり、先程よりは頭が柔軟になった私は、皆さんがそれぞれ誰

平成 30 年 3 月 28 日（水）～30 日（金）

なのか、を考えながら観察しています。

大きななにかを取り出して立って眺めている八十田さんは、おそらく新聞を読んでいる人、座って何か書いたり音楽を聴いたりしている坂本さんは、勉強に飽きている人……図書館にいる人を具体的に思い浮かべることができるようになってきました。

しかし中に入れる自信が全くなく、いつも自分がしているように、〈貴重書閲覧室で典籍の調査を行っている人〉になってみることにしました。

先程の、「有澤さんだけ古典籍を扱っているみたいだった」という感想を取っ掛かりにしたのです。

まずは自分が調査へうかがう時のことを思い出してみます。閲覧申請をした本がワゴンに山積みになっているので、それを想定し、帙（本のカバー）からはずし、本の大きさを測り、題名や奥書を確認し、時にはページ数を数え……という地味な作業を黙々と行ってゆきます。

貴重書閲覧室は、地下や、普通の閲覧室の奥に置かれていることが多いため、外で何が起こっているかは見えない設定です。

外の部屋にいらっしゃる（と、私が勝手に思っている）みなさんは、なぜか急に地面に寝転んでゴロゴロしはじめたり、煙草を吸って職員（と、解釈しました）に怒られたりしています。

ひたすら調査を進めている私が掛け軸を見始めた時に、「館長、すみません！ちょっと困った人がいるので……何とか注意してもらえませんか？」と、職員から声が掛かりました。（あ、私って館長だったんだ……）と思いながら部屋を出て、「すみません、ここはそういう場所じゃないので……」などと言うと、床で自由にゴロゴロしていたみなさんは「すみません」と言っておとなしくなりました。

「ありがとうございます」という声に送られながら、できるだけ堂々と館長室（さっきまでは貴重書閲覧室でした）に戻ると、今度は「すみません、この本が見付からないので探していただけますか」と声が掛かります。どうやら貸し出しカウンターだったらしい、と納得し、書棚を探し始めたところで時間切れ。

先程の議論でも出た、人と関わることによってどんどん役が変わっていくという現象を体感しました。最初にひたすら調査をしていた人の存在感が残せているかどうかは自信がありませんが……

### 〈時間や空間をワープすること〉

今回の試みでは、人との関わり方に変化が出てきていました。というのも、それぞれ設定している空間が異なるため、リンクする時に不思議な感覚が起こるのです。

たとえば、本を探す成さんの横で、李さんは夕日を見ていたそうですが、傍目には、腰に手を当て前を見ているその様子が同じに見えました。「成さんが自分に寄ってくれて一緒に

平成 30 年 3 月 28 日（水）～30 日（金）

夕日を見てくれたのかなという感じになった」と仰る李さん。

また、坂本さんが煙草を吸い、皆に迷惑がられて図書館職員の菅原さんに注意される、という煙草事件は、坂本さんの設定では喫煙室だったのに、他の人はそう思っていなかったことからできた一幕だったそうです。皆が揃って咳をしたのも、煙草を吸う動作に気付いてそれに反応した人と、本のほこりで煙たいのだと思って自分も咳をしたという人がいらっしやいました。

個々で場を変えたことによって、別の空間だと思っていたところが一緒になったり、違う意味のことが偶然同じ動作としてあらわれたりする瞬間がありました。

それにしても再び図書館の職員になっておられた菅原さんは、自由に振る舞う人々の対応に追われていましたが、「今日ほうさいな一とあって」というご発言はさすがです。

また、皆で床でゴロゴロしていたのは「休憩室で寝そべると楽しそうだから」「それにつられてつい」ということ。

後述するように、長塚さんは演劇の題材として黄表紙を選ばれました。そしてその世界に入るにあたり、「黄表紙的に、確固たる自分を作りすぎるよりもちゃらんぽらんでなきゃいけないんじゃないか」、「生真面目にし過ぎない方が良くないんじゃないか」と考えておられます。

たとえば真面目に仕事をしている風でも、結局あまり真面目ではなくて、いつの間にか面白いところに吞まれてしまっている、ということが出来るのか……と思いを巡らせておられる様子。

それに対して、職員の役をされていたはずなのに、いきなりゴロゴロしている人たちの中に飛び込んだ八十田さんいわく、「完全に俳優のノリ」だったとのこと。基本のストーリーは別にあっても、なにか面白いことがあれば一瞬ノリで入って、また自分のストーリーで戻れるということを感じられたそうです。

それを受けた長塚さんは、「みんな自分の人生のなかで図書館に来てると思っているのに、面白いことがあればみんな関係なくノれるか……」と感慨深げ。「ノるために、みんながふわっとして来てるんじゃないくて、それぞれの人生があるのにいつの間にかおかしな世界に行っている方が面白いから、俳優としての心持ちかもしれない」というご発言は、演劇に入る以前にも準備すべきことがあるという意味でしょうか。

また、このやりとりを見守る木越俊介先生（当館准教授）からは、長塚さんの「不真面目になる」というご発言について、「黄表紙の本質には、不真面目になろうとする真面目さのようなものがあるから、それをよく捉えられている感じがします。（たとえば床で転がっている）動作の中に、不真面目になろうとする真面目さみたいなものが感じられれば面白いのでは」というご指摘があり、“不真面目な真面目さ”の矛盾を追及することも、面白いテーマとなりそうです。

平成 30 年 3 月 28 日（水）～30 日（金）



#### 〈本を読む空間—リンクする・共有する—〉

この即興劇について話している最中、「本を読む人が居る空間」に話が及びました。

本を読むという行為は大抵個人的なものです。

図書館は、大勢の人が読書を通じて、それぞれ違う世界にリンクしている空間ですが、自然と人にはなるべく関わらないようにしているため、実は隣の人が一番遠いという、ある意味不思議な空間です。しかし即興劇の中では、積極的に人の動きにリンクしていたり、「休憩室」でごろごろしていたり、実際の図書館の在り方とは異なっているように思えます。

この「リンク（シンクロ）」の在り方に注目したのは、劇を見守っていた木越准教授。どちらかというと、電車の中での読書の在り方の方が近いように感じられたそうです。

たとえば電車のなかで本を読むと、横の人の本をちらっと見るがあります。電車が急停止すると、同じ方向にみんなが傾いてシンクロしてしまふことがあります。このように、本を読んでいる他人との接点が多いのは電車のような空間で、意外にも、読書のために用意された図書館では人と関わることがないことに気付き、同時に、劇中で創り出した図書館は、現実ではないからこそ、同時に笑ったり同じ動きをしたり、横に並んだ時には電車の中のようにもみえる不思議な空間に思えたそうです。

一緒に本を読まない限り絶対に起こり得ないシンクロ。だからこそ、2 回目の試みの図書館は、“理想の図書館”のように感じられたとのこと。

このことに関して、劇の中で〈声に出して笑う〉というきっかけを作られた八十田さんは、「笑ったら怒られるかな、と思いつつ笑ってみたら、みんな意外と一緒に笑ってくれてびっくりした」とコメント。私たちが慣れ親しんでいる図書館には、各々静かに過ごすという不

平成30年3月28日（水）～30日（金）

文律があり、声を出すことに対するビビッドな感覚があると思われたそうです。

それに対して、昔の読書空間はどうだったのでしょうか。

明治時代の文学を専門としておられる野網摩利子教授は、高浜虚子が仲間内で『吾輩は猫である』第一編を音読したところ、作者の夏目漱石までが笑ってしまうくらい面白く、続きを執筆することになったというエピソードをひきながら、近代まで音読をして仲間内で楽しむ習慣が残っていたことを示されました。

また、本の貸し借りを通じて人と関わることもあります。

たとえば本の持ち主が線を引いていたり、付箋を貼っていたり……そういった読書の痕跡を目にすると、会ったことがない人とでも、読書体験を共有することができます。

古典籍のなかにも、蔵書印や書き入れによって由来がわかるものがあり、誰がその本を持っていたかということが、時に重要視されるのですが<sup>4</sup>、同じ空間にいなくても、本を通じて人と交わることができる事例のひとつでしょう。

長塚さんはそういったエピソードを聞きながら、何人かが一緒の場所で、あるいは違う場所で本を読んでいて、それが実は同じ本だった、なんてことがあったら……と、考えを巡らせておられます。

「山東京伝を勉強している人が同じ本を読んでるっていうんじゃなくて、全然違う人たちが、いつの間にか実は同じ世界に引き込まれていた、みたいなほうが面白いんじゃないかと」。「それだけじゃなくて、いつのまにか洋装本が和装本になっていたりして」。

先ほどの試みの中で、それぞれ異なる背景を持つ人たちが、ひよんなきっかけで一瞬リンクしたり、みんなで  
おかしい空間をつくりだしたりしている様子をご覧になりながら、“リアル”な世界から古典の物語世界へとアクセスする道筋を模索しておられるようです。



<sup>4</sup> 野網摩利子先生（当館教授）からは、森鷗外による書き入れは、漢文と英語とを併用しているものがあるという例が示されました。書き入れによって、本の所蔵者の教養や関心が分かる好例です。

### 【黄表紙を読んでみる⑦—『江戸生艶気蒲焼』の音読—】

長塚さんは、古典を演劇化する時に最も壁となるのが歌舞伎・能・狂言だと話してくださいました。古典作品の物語は抽出できても、それを動作や言葉で表現する方法が、既に確立しているからです。

そこで目を付けられたのが、ナンセンスなストーリーを持つ黄表紙<sup>5</sup>でした。たとえば、作者が執筆に行き詰まっている様子を描いた、メタ的な作品や、人間の目や鼻や口を擬人化してしまう作品がありますが、こういったことは歌舞伎ではなく現代劇<sup>6</sup>の方が向いていると思われたそうです。

ひとつの古典籍をひらいたところから、その時間軸が立ち上がってきて、煙の向こうから黄表紙の世界が現れたら……という構想を話してくださいました。

そこで選ばれた黄表紙が、山東京伝作・画『江戸生艶気蒲焼』<sup>えどうまれうわきのかぼやき</sup>（天明 5 年〈1785〉刊）です（あらすじは下記をご覧ください）。

最初ストーリーの面白さに惹かれていた長塚さんは、ご自宅で声に出して読んでみた時に、音読の面白さに気付かれたそうです。

同様に音読を試みた八十田さんも、声に出して読むことで、わかり辛くて頭が拒否したり読んだつもりになりがちなものでもなんとなく入って来る、と感じられたといいます。

そこで全員で円座になり、順に一文ずつ声に出して読んでゆくことになりました。聞きやすい声で、抑揚をつけながら、時にはメロディーに乗せて読まれる皆さん。さすがです。勿論初めてご覧になる言葉もあるので、ところどころ長塚さんや私が解説を入れながら、最初から最後まで読み進めてゆきます。長塚さんからは、「先へ行こうとし過ぎると意味を失ってしまうので、ひとつずつ意味を取ろうとして読む方が良い」というアドバイスも。

また、めりやす（当時流行した歌謡曲）の曲名がずらずらと書き並べられている箇所では、「これは昔の恋愛ソングだから、サザンの曲名がずらっと並んでいるイメージ」という長塚さんの解釈も大変分かりやすいものでした。

何度も読んだことがある作品ですが、声に出すと改めて面白いものです。たとえば主人公・艶二郎の行動のばかばかしさや、悪友「わるみ志庵（＝悪い思案）」のネーミングセンスに、しばしば笑いが起きました。黄表紙は平易な話し言葉で書かれているとはいえ、固有名詞や当時のギャグなど、注釈がないと難しい辛い部分もあるのですが、確かに音で聞くとすんなりと受け入れられます。

---

<sup>5</sup> 江戸後期の草双紙の一種。ナンセンスな滑稽さが特色で、絵を主として余白に文章をつづった大人向きの絵本。

<sup>6</sup> 長塚さんは、十八代目中村勘三郎の「歌舞伎も現代劇」という考え方を紹介し、「現代劇」という言葉を慎重に使っておられますが、ここでは便宜上現代劇としています。

平成 30 年 3 月 28 日（水）～30 日（金）

一般的に、明治以前の読書は音読が基本だと言われますが、黄表紙のような娯楽絵本に関しては、おそらく炬燵で寝そべて絵を眺めるというような享受の在り方だったのだろうと考えています。しかし声に出すと調子の良い文章が多く、作品中の台詞を声に出してみたり、浄瑠璃の文章などは節に乗せて音読していたのかもしれませんが。

長塚さんは、「話の筋はよくとっておく必要があるんだけど、もしかすると子供に読み聞かせてもわかるんじゃないか。むしろ面白い位なんじゃないか」。「俺たちは歌舞伎とは違って古い言葉話すっていうのはあまりないんだけど、黄表紙の文章は無理しないで喋れる程度の言葉で、普通の言葉と混ぜていっても面白そうだなと思った」等と、演じ方についても考えを巡らされたようでした。



### 〈『江戸生艶気蒲焼』〉

- ・山東京伝作／画『江戸生艶気樺焼』<sup>7</sup>（天明5年〈1785〉刊）

あらすじ<sup>8</sup>：百万両分限の仇気屋のひとり息子艶二郎は、醜男のくせにうぬぼれが強く、なんとか色恋に浮名の立つようなことを一生の思い出に仕出かそうと、仲間御道楽息子北里喜之介や太鼓医者わるゐ志庵に相談して、まずめりやすを習い、女の名を腕に彫ったりする。それから評判の女芸者を五十両歩与えて駆け込ませ、そのことを読売を頼んで触れさせるが、一向うわさにもならない。

こんどは吉原の女郎浮名屋の浮名を相手にして、志庵に揚げ詰めにさせ、自分は新造を買い、夜更けて忍び逢う色事の真似をする。そのため妾を抱えて、吉原から帰宅した時、型通りのやきもちの文句を言わせて楽しむ。また浮名と比翼紋入りの手拭を開帳に奉納し

<sup>7</sup> 『山東京傳全集』黄表紙（ぺりかん社、）所収のテキストを使用した。

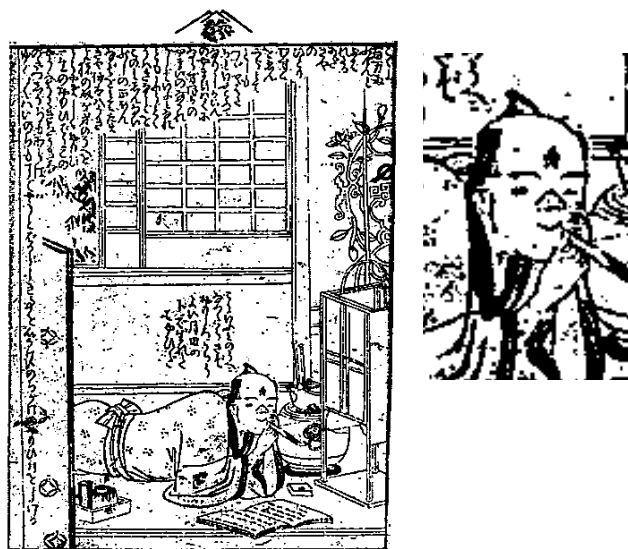
<sup>8</sup> 『日本古典文学大辞典』の解説を参照。

平成 30 年 3 月 28 日 (水) ～30 日 (金)

たり、色男めかして、吉原の真ん中できおいの男を頼んでぶたせて、気絶して大騒ぎとなつて、やっと馬鹿者という浮名が少し立つ。

やがて親に頼んで七十五日間の勘当をうけ、勘当が許されるようにと女芸者たちに浅草観音にはだし詣りをさせる。また色男の商売だと、扇の地紙売りなどをして、人々の嘲笑を買う。

結局心中こそ浮名の最たるものと、浮名を身請けして向島に出かけ、いよいよ刃を抜いたときに、止め手ならぬ盗賊があらわれて、二人の衣服を剥ぎ取る。裸の道行をして家に帰ると、実は父親と番頭が艶二郎を懲らしめるための狂言とわかり、ようやく目がさめて、浮名と夫婦になってめでたく栄える。



### 【黄表紙を読んでみる②—『的中地本問屋』—】

- ・十返舎一九作／画『あたりやしただいほんどいや的中地本問屋』<sup>9</sup>（享和 2 年〈1802〉刊、村田屋治兵衛板）  
あらすじ：本作の板元・村田屋治兵衛が、作者・一九に新作を依頼するところから話が始まる。治兵衛は一九に「作のよく出来る妙薬」を入れた酒を飲ませ、出来の良い原稿を入手する。その後も早く売り出すために、板木を彫る職人、板を摺る職人などに、仕事がかどる薬を与え、調子よく本の売り出しにこぎ着ける。売り出したところ大人気で大儲け、大満足の村田屋に、一九は祝儀の蕎麦をご馳走になりハッピーエンド。

<sup>9</sup> 『江戸戯作文庫』（林美一校訂、河出書房新社、1987 年）所収のテキストを使用した。



そもそも本を作る作業は、分業制で行われていました。

まず本文の作者が、本文と下絵を描きます。絵は文の作者とは別に浮世絵師が清書する場合が多いのです<sup>10</sup>。その後、字が上手な人（筆耕）が文字を清書し、原稿の完成です（校正も行います）。

それを元に、彫師が板木をつくり、摺師が紙に摺ってゆきます。摺り上がったら表紙などをつけて糸で綴じ、本の形になります。このように、多くの行程があり、それぞれを別々の人が担っていたのです。

まずは、黄表紙に描かれている人物の動作を実際にやってみようということに。身体の動きを確認したうえで、その動作を拡大することを目論んでおられるようです。

ベースさえ分かれば、ものすごく大きな本になっても問題なく出来るのではないかと、ということで、和本の造本にお詳しい入口敦志先生（当館教授）に細かいことをうかがいながら、ひとつずつ行程を確かめてゆくことになりました。

最初は〈板木を彫る彫師〉の動きです。

絵を見ると、私たちが図工の時間で使った彫刻刀とは違う使い方をしているようです。入口先生にうかがうと、鉛筆のように握り、身体の方に引きながら彫るのだそう。それ以外にも、場所によって工具を変えることもあり、その場合には扱い方も変わるのだそうです。

また、「下絵を板木に合わせるにはどうするんでしょう？」という質問には、裏返しにした紙を板木に貼り付け、紙ごと彫ってしまうのだとのこと。裏返しにしているので、当然文字は鏡文字になっているのですが、職人はその通りに彫るのが仕事なので字が読めなくても良いそう。「字を読めないから、間違って読めない字を彫ってしまっているものもあるんですよ」と、例をひきながら教えてくださいました。

他にも「場所によって役割分担をするんですか？」「一人が一面を担当するのでしょうか。」「失敗したらどうするんですか。」「紙は現在よりも大分高いので、そう簡単にやり直しができないんです。」「じゃあすごく緊張しますね。」「大変な仕事だ。等というやりとりを重ねる内に、彫師達がどのような人で、どのような作業を行っていたのかが、段々と浮かび上がってきます。

次に、摺師の仕事ぶりを観察してゆきます。なんとなく力仕事のような感じがしますが、どのような道具を使っていたのでしょうか。

入口先生は挿絵を示しながら、手前が高くなっている斜めの台を使っていることを説明していただきます。「馬車を回しながらこのように摺ります」という先生の動作を、みんなが真似してみます。

---

<sup>10</sup> 詳細について指示を伝え、絵師はその下絵と指示にしたがって挿絵を完成させます。

さらにこの馬連について、今の職人さんから聞かれたという興味深いエピソードが。馬連にはそれぞれ癖があるので、自分のものは他の人に触らせないそうです。こういった、職人さんしか知り得ないディテールが分かると、この描かれている職人たちが持っているのもマイ馬連なのか・・・と想像して楽しくなってしまいます。

他にも注目すべきディテールはたくさんあります。入口先生が、「墨の乗りが良くなるよう、まずは紙を濡らします」と言うと、すかさず「どうやって濡らすんですか？」という質問が。「霧吹きでしょう」という答えにも、「霧吹きってあったんですか?」「どうやって使いますか?」と、どんどん質問がとびます。

細かなところや描かれていない部分をも見逃さない皆さんの観察力と、何を聞かれても答えが返ってくる入口教授には驚かされるばかりです。



次に描かれるのは、摺り上がった原稿を折って、ページを合わせている様子です。

原稿を折っている子供の側には山形の台のようなものがありますが、それをつかって折癖をつけたあとにきちんと折るのでしようとのこと。技術があまり必要ないので、挿絵では子供が作業しているように描かれているのだそうです。

また、紙をきちんと折るには表面がつるっとした重しがあった方がいいよね、ということから、丸い石なんか最適じゃないか、というアイデアが出てきました。挿絵に描かれていない道具や行程は、このように考えを出し合って、隙間を埋めてゆくのです。

この後も、表紙を掛ける作業、穴を空ける作業、糸で綴じる作業など、一つずつ動作の確認をしてゆきました。



平成 30 年 3 月 28 日（水）～30 日（金）

そうすると、これまでなんとなく理解していたことでも、細かな手順がわからないと困ってしまいます。たとえば穴はどのタイミングで空けるのか？一つずつあけていては手間が掛かりすぎないか？題簽（題名が書いてある細い紙）は、いつ作られているのか？

普段認識している大まかな手順の隙間に、たくさんの細かい作業があることに気付かされ、しかもどのような動きをしていたのか、という問題になると、使われていた道具まで想定しなければならず、ごまかしがききません。

そして私が驚かされたのは、皆さんが「もっと便利な道具があったんじゃないか」「こうしたらもっと速くできるんじゃないか」と、次々とアイデアを出されたことでした。確かに当時の職人達も、もっと自分の仕事がしやすくなるように様々な工夫を考えたことでしょう。皆さんが“本当に自分がこの作業をする職人だったら”という心持ちで考えておられることがよく分かりました。

そしてこの精査と工夫を通して考えたことは、ワークショップの最後に行った試みの中で、存分に効果を上げてくれたのです。



平成 30 年 3 月 28 日（水）～30 日（金）

### 〈場面を再現する〉

実はこの取り組みよりも前に、『<sup>あたりやしたにほんどいや</sup>地的中地本問屋』ストーリーの面白さに注目した試みを行っています。二組に分かれてそれぞれ好きな場面を選び、少しの打合せの後、それぞれの方法で場面を再現してみるというもの。私も中に加えていただき、挑戦いたしました。

まず、高木さん、菅原さん、引間さん、李さんのチームは、板木を彫る彫師の場面を選びました。

速く本をこしらえて思う存分売るつもり「村田屋」（板元）は、板木屋が怠けては大変と、琵琶湖の水を混ぜた酒を持参し、職人たちの仕事のスピードを速くします（太鼓、富士山と琵琶湖が一夜にして同時に出来たとの伝説に基づく）。

短時間の打合せの後、早速劇が始まりました。

菅原さん、引間さん、李さんが座って板木を彫っていますが、細かい作業をずっと続けているので疲れている様子。目元をこすったり肩に手をやったりしています。そこへ村田屋役の高木さんが「お疲れ様！」とやってきます。激励のために酒（実は秘薬）を勧めるも、職人達は忙しいので何だか不機嫌……それでも「どうぞどうぞ」と勧めると、仕事をしながら口にします。

酒を呑んだ彫師たちの手の動きはどんどん速くなりますが、本人達はそれに気付いていない様子。なぜかすごい速さで仕事ははかどってゆき、「もうここにあるの終わっちゃいますよ！」「はやく次の持ってきてくださいよ！」と催促する程。

原作にある「あなたが下さった酒はぶしつけながら水が混じっておりましたから、さっぱり酔いませぬ」という台詞をふまえ、「こんな薄い酒じゃ全然酔えませぬよ！」「水入ってんじゃないですか、水」と文句を言いながらも、手は猛スピードで動き続けます。

その様子を見ていた村田屋は機嫌よく帰って行き、外で「思いの外よく効きやがった。実は仕事ははかどるように、酒に琵琶湖の水を入れておいてやったんだ。へっへっへ」と、悪い顔で種明かしをします。

ずるがしこい村田屋像と、無愛想な職人像の対比が面白く、淡々としている職人達の動きがいつの間にか速くなってゆくのが見所でした。

平成 30 年 3 月 28 日（水）～30 日（金）



私に加えていただいたチームのメンバーは、八十田さん、坂本さん、藤間さん。まずは一番にぎやかそうな場面を選びました。

この場面は、表紙を掛ける作業（表紙となる大きめの色紙を、普通の紙に被せる）をする小僧達の仕事がかどるように、村田屋が愉快的な歌を歌いながら太鼓を持って囃すと、子供達は皆浮かれ出し、夢中になって働くというところ。

小僧役の藤間さんと私は並んで座り、少し年下の設定の藤間さんは、先輩小僧（私）の動きを真似ながら表紙を掛けています。へらで表紙に線をつけ、四隅を折る……そうしていると、村田屋役の八十田さんと番頭役の坂本さんが、小僧達の周りを踊りながら、「そりゃこそ掛けるわ、表紙を掛けるわ、どこすこどん。どこすこどん」「ちゃんちきちゃんちき、すっちゃんちゃん」と囃します。その踊りと拍子の面白いこと……！小僧ならずとも愉快的な気持ちになります。太鼓を叩く村田屋の動きは大きく、鉦を鳴らす番頭は、小僧の周りであやすように歌っているあたり、絵をよくご覧になっているなあと思います。

私たち小僧は、原作にある「今朝おまんまを食べたままだが、根っから腹が減らぬ」「表紙掛けは面白い」を少しアレンジして、「表紙を掛けるの楽しいねえ」「ご飯食べるのを忘れるねえ」と言い合いながら、お行儀良く表紙を掛け続けます。

平成 30 年 3 月 28 日 (水) ～30 日 (金)

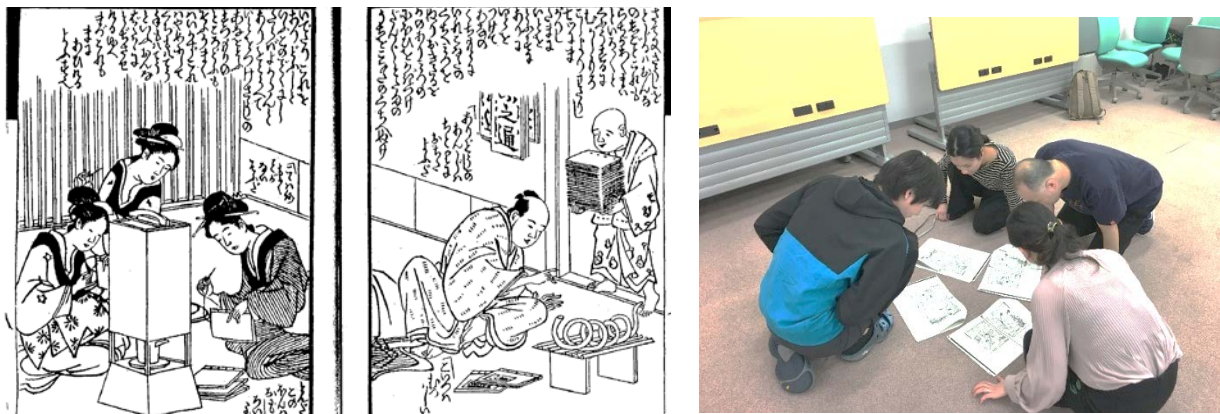


そして次に選んだのは、本を糸で綴じる場面です。

本を綴じるのは女性の仕事。挿絵の女性たちは、行灯のもとで「とんだこの本は面白いよ」などとおしゃべりをしながら本を綴じています。一方村田屋は、蟻に糸を付け蜜の香りを嗅がせて誘導し、穴を通すことを思いつき、筒を使ってテストをするもののあまりうまく行かない様子。「こいつはむつかしい」と、のんきに悩んでいる、という場面です。

そこで、女性達（八十田さん、藤間さん、有澤）が「この本絶対売れるわよ、読んだことないけど」「絵がいっぱい入っているもの」などと中身のないお喋りをしながら手を動かしている側で、村田屋（坂本さん）がなぜか蟻に糸を付けて筒を通そうとしており、時々その蟻が逃げ出しては女性達の邪魔をする（繰り返し）、というストーリーが出来上がりました。

この場面では、珍しく村田屋の妙案もなく、結局女性達はマイペースに仕事をこなしているのが面白いのですが、そのコントラストをうまく捉えた劇になっています。



これは初日の取り組みだったのですが、皆さんが短時間で、描かれた一場面から、それぞれの人のキャラクターや立ち位置、ストーリーの面白さを捉え、そこを見せるような劇に仕上げられる力に驚かされました。

また、彫師の場面のように、最後に種明かしをする方法、本を綴じる場面のように、説明はせずに動きだけで状況をつたえる方法など、ストーリーを表現するのに様々な方法があるのだなあと思いました。

### 〈動きを拡大する〉

さて、このワークショップもいよいよ佳境です。

長塚さんから「早く精巧に彫りたいという目的は同じで、理解した基本をもとに、段々「こうの方が良い」みたいなアイデアを入れて行って、良さそうだったらみんな真似していきこう」という指示があり、前述の〈動きを精査する〉という取り組みをもとに、動きや発想を拡大してゆくこととなりました。

まずは彫師として高木さんが登場しました。

少し改まった感じで正座し、目の前の板に版下を広げているようです(板木の上に湿らせた版下を裏返して置き、文字の上から彫ってゆく)。「これは水で濡らしていいのかなあ」「どこから彫ろうかなあ」と、先ほど全員で確認した動きを丁寧にたどりながら慎重に始めておられました。

平成 30 年 3 月 28 日（水）～30 日（金）



観察している長塚さんは、「新人だなあの人」にやり。しかし次にやって来た菅原さんが「おはようございます！今日はどこからはじめましょうか」と声を掛けたので、「あ、意外と熟練の人だった。毎回新鮮な気持ちでやってんだな」と、高木さん像を修正されます。作業を確認しながら、職場の人達の人となりや人間関係が段々と明らかになってゆきます。

高木さんと菅原さんは、作業の難しい箇所について話しています。

「このくちゅくちゅってなってる部分がよくわかんないんだよなあ」「勘だから、勘」…先ほどの入口先生の解説で、職人は版下のとおり彫るだけで良いため、字が読める必要はないということを反映しているのでしょう。

他にも、「水ってどうやってとばします？」「その道具つかったらいいんだよ」と、確認し合ったり、水で濡らして紙を薄くする過程を「空気を抜いて」と細かく手順を示したり、紙が乾くのを待つ間の時間の経過を、立ち上がってくるくる回ることによって表す決まりをなんとなく作ったりすることで、見ている人にも舞台上で行われている作業やその表現の仕方が分かるように工夫しておられるのが分かります。

平成 30 年 3 月 28 日（水）～30 日（金）



そうこうしているうちに、どんどん皆さんが中に入って来られ、それぞれ特徴がある動きを

たとえば、作業が丁寧な高木さんの隣に来た八十田さんは、逆に豪快で大きな動きで次々と完成させてゆき、周りに「速いけど雑なんすよね」と言われています。助っ人としてやってきた引間さんはやる気がなく、先輩に注意されてもどこ吹く風。藤間さんは職人の間を走り回ってお茶を配っています。

成さんは現場監督のようで、職人たちにはっぱをかけています。先ほど「字がわからない」と言っていた高木さんには、「これは「す」っていう字で、穴が開いていないと読めないから」「木を埋めてなおしてください」と指示。「間違えた箇所は埋木で修正する」という解説をしっかりと踏まえていらっしゃいます。

職場の風景が見え始めたところで、長塚さんから「リアリティから外れて行ってもいいから、早く終わるように工夫して。頭の中で早くできるイメージをしてみてください」という指示が。

それを受けて、道具の使い方を変えた坂本さん。彫刻刀を反対側の手で押しているようです。「背景のところは広いから押して彫るんですよ」。「あー押すのか」と、他の職人たちも真似をし始めます。

長塚さんからはさらに「ちょっとずつ物を大きくして行って」と指示が出されます。

職人さんたちの動きが段々と大きくなり、扱っている板や紙が大きくなっているようです。一枚の板木に版下を置くのに一人では持ち切れず、三人掛りで作業し、紙を薄くする作業も手ではなく足でのばし始めました。

彫刻刀もいつの間にか大きくなっていて、一枚の板木を数人で彫っているところもあります。

平成 30 年 3 月 28 日 (水) ～30 日 (金)



そこへ「もっと便利で早く彫れる道具があるかもしれない」と、長塚さんからの提案が。  
それを受けた八十田さんは、何本も彫刻刀が付いている道具で彫り始めます。でも、同じ文字が何行も彫れるのでは……と、周りの職人さんたちが心配したところで、いったん終了。長塚さんのコメントをうかがいました。以下、コメントの概要です。



平成 30 年 3 月 28 日（水）～30 日（金）

- ・店の中の人間関係に面白味がいきすぎちゃったけど、色々な役割の人がいたのは面白かった。お茶を入れる人がいるのも、風景として面白い。
- ・初めに細かい部分を確認しているからこそ、大きくなったりした時に面白かった。
- ・初めの人がゆっくり確認しているのは良いけど、全員が戸惑いの時間をつくらなくても良いのでは。ただし急いで次に行きたいわけではないので、工夫を。
- ・（版下を板木に広げる時の）水の掛け方が問題になっていたけど、確かに実際どうやっていたのかは分からないので、見えない部分を想像するのが面白い。
- ・拡大した場面では、場所を拡大してもよかったし、彫刻刀ではなくスコップなんかをつかって良かったのでは、たとえば足を掛けて彫ってもいいんじゃないか。



このコメントを踏まえ、次は刷る工程に挑戦してみることとなりました。

先ほどと同様に、先陣を切るのは高木さんです。

誰もいない作業場へ入り、ひとつひとつの動作を丁寧に確かめる高木さん。

長塚さんはその様子に「朝早いんだろうなあ」「この人が作業場の鍵もってるんだろうなあ」とコメント。確かにそういう人いますね……

高木さんは、まず馬連の感触を確かめてから、力を入れて細かく円を描くように摺り始めました。先ほどの入口教授のお話を忠実に踏まえ、この工程の動きを丁寧に表現してくださっています。恐々紙を持ち上げて出来上がりを見ている様子などは、昔図工で版画を摺ったことなどを思い出させます。

ならんだ菅原さんは淡々と、八十田さんは豪快な動きで派手な掛け声をかけながら作業していますが、細かく円を描くように摺るという基本は忠実に守っておられます。



そこへやって来たのは現場監督の成さん。「200 枚ですよ、間に合わないですよ」とはっばをかけます。「はい」と素直に作業励む職人たち。ところが「俺も手伝いますんで急ぎましょう」と菅原さんの馬連を借りると、「これ俺の馬連」と怒られてしまいました。「職人は自分の馬連を人に触らせない」という豆知識を取り込んだワンシーンです。

さて、成さんの「さあ、作業倍の速さにしましょう！」という掛け声の元、職人たちは様々な工夫をし始めました。

たとえば手伝いに来た李さんが「墨すりますよ」と言うと、「すらなくていいやつあるからそっち使って!」。墨汁があるなら作業をひとつ減らせますよね。

さらに成さんから「もう間に合わないから、くっつけて一気にやっちゃいましょう!」という提案が。板木を一ところに集めて大きな紙の上に置くと、八十田さんがそこへ飛び込み、身体全体を使って豪快に摺ります。そしてみんなで馬連を使って細かいところをフォローするという方法です。

2 回目は更に大きなサイズに挑戦。墨を塗るのではなく、板木の上に流してモップを使って広げてしまいます。紙も全員で持ち運ぶ程大きなサイズになっています。そして板木とズれないように、慎重に慎重に紙を重ね……全員でそこへ飛び込み駆けまわり、身体全体を使って一気に刷り上げます。先ほどの慎重さとの対照が笑いを誘う一方、確かになんだか作業がスピードアップした気がしてきます。

そこでいったん終了、再度長塚さんのコメントをうかがいます。

まず、先ほどと同様に「最初精密にやっている人がいて、段々ピッチを上げていくのがよ

かった」というお言葉。最初にひとつずつ確認を行う場面があると、違うサイズやペースになっても、何をしているのが了解されます。

また、刷り終わった後の在り方について、「出来上がったものに対する目線が重要。紙が大きくなったときにもそれがあると、ふわっと世界が広がるような感じがするから」とおっしゃっておられました。確かに大きな紙に摺りを施し、それをみんなで持ち上げる下から大きな絵をのぞき込む成さん、裏返しにすると段々完成した絵が出てくる様子、それらは「世界が広がる」という表現がぴったりだったように思います。

さて、続けて他の工程についても身体を動かして確認してゆくこととなりました。

まずは丁合です。丁合とは、何枚も刷られた各丁の束から、1冊分ずつの丁をそろえる作業のことを指します。なんだか一気に地味になりますが、具体的にはどのような動きになるのでしょうか。

『<sup>あたりやしたじほんどいや</sup>的中地本問屋』を参考にしながら、入口先生にお話をうかがうことにしました。

『<sup>あたりやしたじほんどいや</sup>的中地本問屋』の丁合の場面では、なにやら三角の台のようなものを使って紙を折っているようです。それを指しながら、「三角の台で大まかに折り目を付けて、その後一枚ずつ綺麗に折り、それを重ねて同じ頁だけの山をつくるんだと思います」。「何人も数珠みたいに連なり、バケツリレー的に作業をすすめてゆくと効率的じゃないかな」と入口先生。さらに長塚さんが「黄表紙は5丁ですよね」。「部数は100位？」と、具体的なイメージを固めてゆかれます。また、『<sup>あたりやしたじほんどいや</sup>的中地本問屋』でお店の丁稚のような人が折り目を付けているところを見ると、それほど複雑な作業ではないことが分かります。



この確認作業を経て、次は実際に動いてみます。

やはりここでも「作業場の鍵を持っている」高木さんが初めにやって来て、同じ丁ごとで束を作って並べ、一番端の束の前に座り、折り始めました。

続いてやってきた菅原さん、八十田さんも、お馴染みのキャラクターを保ちながら、順に

平成30年3月28日（水）～30日（金）

座って担当の束にとりかかります。菅原さんは先ほど使った馬連を取り出し、これで折り目を付ける作戦のようです。

そしていつも「スターみたいな現れ方」をする成さんが、「出来上がったやつは反対側に置かないと、取っていく時に取りにくいから…」と新しい視点を示しました。

ある程度折り目を付ける作業が進んだところ、で李さんが「丁合の時間ですかね」と登場し、折り目を付ける人たちとは反対側に回って（確かに反対側に置いて正解でした）一枚ずつ拾い、束を作ります。出来た束は十字に重ねて……というあたり、さすがのリアリティです。

この工程では、束を作るだけで良いのでしょうか？

見守る入口先生や長塚さんが穴あけのことを話しているのを受け、作業場でも「ここで穴開けとかなないと」「穴あけの子おそいなあ」とざわつきます。

そこへ助っ人の藤間さん。「おはようございます！初めてなんですけどどうやってやったらいいですか」とやって来てくれました。先輩たちが「適当に、4つ位ぶすぶすって」「韓国は穴5つです！」とわいわい指導します。

実際にはどのように穴を開けると良いのでしょうか。ここでいったん止め、入口先生にご意見をうかがいます。

同じ箇所に開ける必要があるため、定規みたいな道具に印を打っておいて、そこに合わせて、キリか千枚通しみたいな道具で打つのでは、とのこと。最終的には吹矢みたいに針をうったら早いかもしれないね、などと言いながら、まずは現実味のある動きを行ってみることになりました。

ちなみに、ここで「穴あけの人足りないんだよなあ」という声を受けて、私も助っ人として登場します。

さて、長塚さんから「今日は折っても折ってもどんどんでくる日なんだけどうする？」と課題ができました。

みんなが動かなくても済むように、近づいて作業をする工夫をしましたが、なんだか地味です。「工夫の仕様がなあ」という長塚さん。

「振り向いたら、さっきの大きいやつがあったらどうする？」と、さらに新しく工夫を出されました。

「うわあ、大きいなあ」とざわつく職人たち。この大きな紙に折り目を付ける道具はあるのでしょうか。「大きい三角あるかなあ？」と悩んでいるところに、「あ、じゃあなりますよ」という引間さん。体の柔らかい三人が両手と両足を床につけて身体で三角形を作り、折り目をつける台になってくれました。

そこへみんなで大きな紙をかぶせて跡をつけ、台から外します。台から外すために紙を持

平成 30 年 3 月 28 日（水）～30 日（金）

ち上げるのも一苦勞、指示を出し合いながら、ふんわりと 2 つ折りにされた紙を床に置きました。折り目を付けるのも手でするのは難しそうということで、足で踏んで跡をつけることに。紙の両端に立ったふたりが裸足になり、折り目沿いに小さく踏みつける様子はなんだか可愛らしいものです。

ここで作業はひと段落。長塚さんのコメントをうかがいます。

物を大きくすると小人の作業みたいになるけど、何をやってるかがよくわかる。丁合に関しては、あまり展開の仕様がなかったので、大きくすることで初めて面白くなるんじゃないかな、ということでした。先ほど足で踏んで折り目を付けた八十田さんも、「細かく踏んだのは頭のどこかで小人になってるところがあった」とおっしゃいましたが、確かに大きなものを扱うと、職人たちが小人になったかのような感覚になります。

そしていよいよ表紙を掛けて糸で縫う作業です。

この作業は、以前〈場面を再現する〉試みで、藤間さんと私とがやってみたことがありました。そこでこの動作をみなさんで確認することに。



表紙用の紙は少し大きめで、他の丁に合せて中に折込む必要があります。表紙の紙上に丁合した束を置き、紙のサイズに合わせて表紙の紙にへらで跡をつけ、余った部分を折込む…という動作をし、ハタと気づきました。折込んだ箇所糊はいつ塗るのでしょうか。

入口教授に助けを求めると、「縫った後じゃないと紙が固くなっちゃうから、糊は後で付けるはず」とのこと。確かに、そちらのほうが合理的です。

平成 30 年 3 月 28 日（水）～30 日（金）

また、表表紙と裏表紙を作らなくてはならないので、2 回作業をくり返さなければいけないこと、穴を開けるのは、表紙を掛け終わったこのタイミングでなければならなかったことにも気づきました。

理解しているようで、詳細な手順は意外に分かっていなかった自分に気づかされます。このようにすべての工程をさらってみることで初めて分かることがとても多いのです。

他にも様々な意見が出てきます。

まず、丁合した束を、規格通りのサイズに合わせて切る（化粧断ち）の過程を忘れていました。化粧断ちをする時には、規格の型（板）をあてて、余った箇所を包丁で切るのではないかとのこと。そうすると、この板さえあれば、表紙だけを先に用意しておくことができるのではないのでしょうか。

江戸時代の本は、種類によってサイズが大体決まっています。確かに何種類かのサイズの板が用意されていても不思議ではありません。



また、和本を観察してみると、折込まれた表紙の四隅は重ならないように切り落とされています。板を置いて跡をつけたところで、包丁を入れるのでしょうか。しかも表紙の折込み方の幅が違い、明らかに天地が決まっているそうです。単純に見えた工程ですが、意外と凝ってる上に地味な作業なので、「内職みたい……ちょっと嫌だな」というつぶやきも聞こえてきました。

さて、これで表紙と、丁合された束がたくさんできました。

これが終われば表紙を掛けて穴を開け、糸で縫い、糊で表紙の端をつける工程です。題簽（タイトルを書いた長細い紙）を表紙に貼るのも、糊を使うタイミングで一緒に行うのでし

平成 30 年 3 月 28 日 (水) ～30 日 (金)

よう。

それにしても、穴を開けるためにどのような道具を使っていたのでしょうか。入口教授によると、穴はいつも表も裏も同じ位の大きさであいてるそうで、千枚通しだとそのような穴にならないはずなので、いつもどのような道具を使っているのか不思議に思われるそうです。

みなさんから、釘みたいなものかな、とか、先がとがっていない筒状の固いものでは、と、アイデアがだされますが、よくわかりません。単純なようで意外と謎めいている工程です。

やはり細い釘状のものを、木槌のようなもので叩いて刺しているのでは、という意見が出ましたが、4回同じ作業をくり返すのではなく、長い木の軸のようなものに4本針を付けた道具であれば、一気に何冊もできるのでは、というアイデアが出てきました。これは発明です。均等に力がかかるためには、本を下に置いて上から道具を押しの方が良いのでは、という具体的な案も出されました。

考えてみるとありそうなものですが、残念ながらそういった道具が残されているという情報は聞きません。しかしひとつひとつの工程を丁寧になぞった職人たちの発想は現実的で、そういう道具を使っていたかもしれないなあ納得するものがあります。



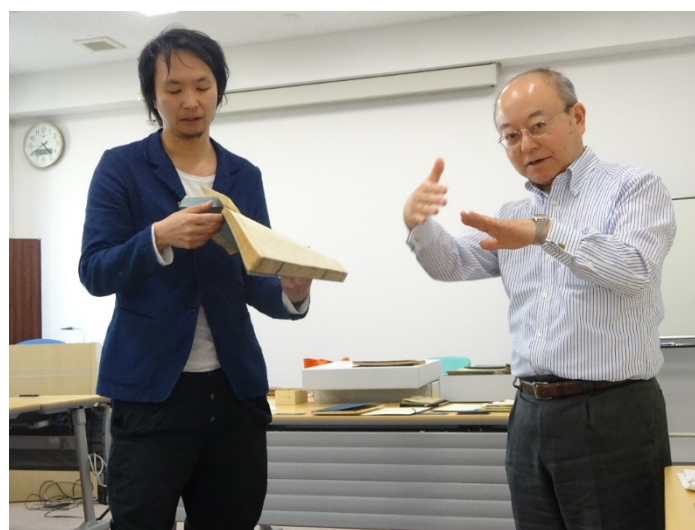
平成 30 年 3 月 28 日（水）～30 日（金）

そして、あとは縫うだけです。

入口先生が和本を示しながら、玉結びがでていないことを確認させていただきます。紙の間をちょっとめくって、穴のあいていないところから針を入れて隙間から縫い始め、一筆書きの要領で全ての穴を通し、最後は背中に糸をだして終わりです、と、工程を示して下さいました。その工程をシュミレーションしてゆくみなさん。

入口先生の、「コツがあるのは最初と最後だけで、あとは全部の穴を通すだけだから簡単です。一つの穴には3本糸が通っていることになります。最後、三本の糸の下をぐるっと回して括るだけです」という解説を聞いて、最後の部分を結ばないと、ほどけやすいんじゃないかと心配しましたが、立派な本には中綴じ（中身だけをこよりで簡単にくくったもの）があるので、中身は大丈夫とのことでした。きっちり糸を張ると紙が痛んでしまうため、糸がほどけたり切れたりする程度の方が良いそうなのです。

「本を縫うって感覚が不思議じゃない？」などと言いながら、本を綴じる作業を各自でシュミレーションしてゆきます。やってみると、一筆書きという要素は進行の上でわかりやすいポイントだな、などと気づきがありました。



〈黄表紙ができるまで〉

さあ、これで黄表紙を作る全工程を、動きを伴いながら確認したことになります。

いよいよ全ての流れを通してやってみることになりました。

長塚さんからは、「図書館にいる人」をやった時のように、どんどん次の人の動きに吞まれて工程が進んだり、初めて見た人でも何をしているのか分かりやすいように、時には大きくしたりしながらやってみて欲しい、とのこと。さて、どのように黄表紙が作られてゆくのでしょうか。

ここで菅原さんから重要な指摘が。

「最初のシーンいらないの？」

『あたりやしたじほんどいや的中地本問屋』では、作者(=十返舎一九)が完成した原稿を本屋(=村田屋治兵衛)に渡すところから物語が始まっています。

長塚さんからは、「一人の作者が作ったものが、この後大勢の人によって作られていくのが面白いなと思ったところなので、是非版元にもっていくところからやって欲しい」とのこと。

黄表紙などの常套表現ですが、作者の元へは版元の丁稚が度々催促に来ているイメージですので、ここでも原稿を書き上げた作者が、様子を窺いに来た丁稚へ原稿を渡すところから物語を始めることにいたしました。



さて、作品を書きあげてお茶で一服している菅原さんのもとへ、丁稚の藤間さんが駆けてきました。

「おはようございます！先生、作品の方は？」「とうに書きあがって随分君を待っていたよ。ここにあるから持っていきなさい。ベストセラーになると思うから。ちゃんと村田屋さ

平成 30 年 3 月 28 日（水）～30 日（金）

んに持って行ってね」と、随分新作に自信がある様子の作者先生。

原稿を抱えた丁稚が走って行ったのを見送りながら、「いくらでも書けるな」と余裕の発言です。『あたりやしたじほんどいや的中地本間屋』の中で、よく作品が書けるようになる菓を、村田屋が盛っているところを利かせているのでしょうか。

さて場面は変わり、ここは村田屋の彫師たちがいる作業場のようです。

作業場の責任者である、高木さんが原稿を受け取り、成さんと一緒に「これが新作ですか」などとしばらく眺める様子には、本当にこのような一幕があったかもしれないと思わせられました。

「5丁だから板が5枚だね」と確認し、一人一枚ずつ担当するようです。先ほどの確認を踏まえ、原稿に水を塗って薄くするところ、それを板木に貼るところ、広い箇所と細かい箇所とで彫刻刀の使い方を変えるところ、ひとつずつの工程を丁寧に動いてゆかれます。

「腰痛いっすね」「今回の細かいから……先生頑張ったんだなあ」というちょっとしたつぶやきも、〈一人の作者が作ったものが様々な人の手を経て完成する〉という黄表紙の在り方を思わせるものです。

「おはようございまーす。3丁目担当します」と作業に加わった八十田さん、淡々と準備を始めたかと思うと、先ほど発案しておられた〈一本の木に何本も彫刻刀が付いていて、力の加減でうまく一気に彫れる〉道具を取り出し、早く進めようとしておられる様子。まわりの職人たちは「またあれ使ってるよ…」と呆れ顔でしたが、作業中の板をのぞき込み「あ、結構いけるんだね！早いんだね！」と驚いた様子。「一気に4行いけますからね。あと、穴を開けるときのにも使えます」。なんと、意外にうまく彫ることができるようです。高木さんも「あ、なるほど、意外と自由度高いんだな……」と新しい便利な道具を使いはじめ、「すごいこと考えるもんだなあ」と職人たちに受け入れられた様子です。

さて、「そろそろ持って行かなきゃいけないんですけど……」と催促がやってきたところで、残りの彫りの作業は助っ人に任せ、横で刷りの作業に入りました。彫りの作業は、便利な新しい道具を使う人がいたり（たまに同じ文字を彫ってしまう）、スコップで彫る人がいたり（たまに深く彫りすぎてしまう）、最初よりも随分と自由度高く、しかもスピードアップしています。

平成 30 年 3 月 28 日（水）～30 日（金）



刷りの作業はどのように工夫すれば早く出来るのでしょうか。職人たちは、5枚の板木をくっつけて、一緒に刷ってしまうことにしたようです。寄せた板木の上に墨を流してモップでのぼし、大きな紙を慎重に広げます。そして、そこへ皆で飛び込み転がりまわって、体中を使って刷ります！これは一気に刷れてしまいますね。「これ汚れるのが嫌なんだよね」という感想は、確かにその通りです……。いよいよ出来上がりを確認します。大きな紙の隅を「せーの」で頭上に持ち上げ、完成した原稿を見上げる職人たち。一斉に「うわあ」という感性があがります。そこにはどのような景色が広がっていたのでしょうか。

職人たちの工夫はまだまだ続きます。刷り上がった大きな紙を乾かす場所を探すうちに、折り目を付ける三角の台に初めから掛けてしまっは？ということで、ささっと三角形になる三人。他の職人たちで、慎重に紙をかぶせます。

平成 30 年 3 月 28 日（水）～30 日（金）

ここで時間経過の儀式。その場でくるくると回って、墨が乾く時間を表現します。最初に作った仕組みをここで取り入れるのか！と感心した場面でした。そして乾いた紙に先ほどのように折り目をつけ、足で細かく踏んでしっかりと跡をつけます。

このあたりで「5 丁分を一枚にしたんじゃないか？」と気づきましたがそこはご愛敬。とりあえず大きいままで表紙を付けることにしました。化粧断ちするために大きな板を紙にかぶせ、とても大きな刀で余計な部分を裁断します。「大きいよ、危ないよ」と言いながら大きな刀を振りかざす八十田さん、それを受け止めようとする高木さん、板をおさえたり刀に力をいれたりするみなさんは、なんだかいつの間にか小人になっているようにも見えます。

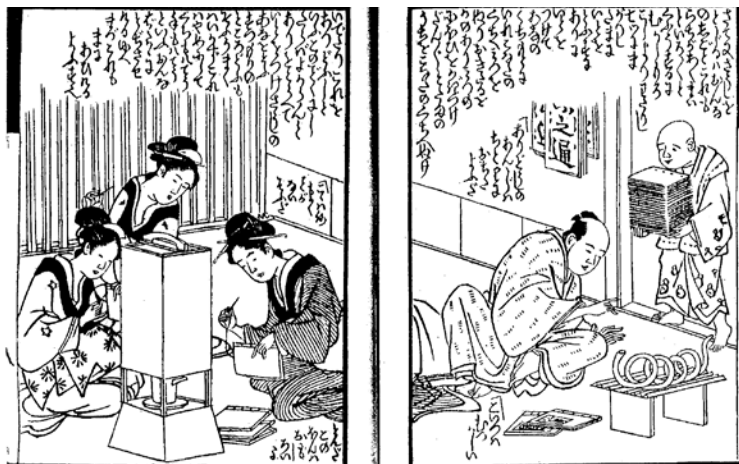
紙を入れ替えて今度は表紙を裁断する際も、いったん大きな板を壁に立てかけるくんだりなどがあり、そこに実際にものがあるような気がしてきます。

そして表紙を掛ける作業。四隅に折り目を付けて、みんなで踏みます。

このあたりで疲れが見えてきますが、もう一息。

穴を開ける作業では、先ほどの〈一本の木に何本も彫刻刀が付いていて、力の加減でうまく一気に彫れる〉道具が再び活躍します。伏線を回収するのはさすが、というか、このサイズになるとそういう便利な道具があってもおかしくないような感覚に陥ります。

この大きなサイズの黄表紙にあわせて太い針が登場しましたが、どのように綴じましょうか。ここで引間さんから「針を持って穴をくぐったらいいんじゃないですか」との提案が。  
あたりやしたじほんどいや  
『的中地本問屋』では、村田屋が蟻の足に糸を括りつけて穴を通そうとしていましたが、このサイズなので人間がその役を担うようです。先ほどの「一筆書き」の工程をみんなで確認しながら、一針ずつ縫ってゆきます。ここで活躍したのが、身体が柔らかい引間さんと成さん、坂本さん。全身を柔軟に使って穴をくぐってゆき、他の職人たちはルートを考えたり紙を持ち上げたりして協力します。最後は三本の糸の周りを一周して同じ穴に通す、というところまで、なんとかやり遂げました。



平成30年3月28日（水）～30日（金）

最後は題簽です。そういえばまだ作っていなかったのに気がついて、丁稚（藤間さん）が先生（菅原さん）の元へ走りました。「先生！タイトルをとりにきました！」「あ、まだ書いていなかったか。じゃあこれを持って行ってね」「タイトルいただいてきました！」このフレキシブルさ、即興劇ならではです。

さて、糊を使うのは二箇所。表紙の折り込み部分と題簽です。少し考えて、表紙から糊付けした方が良いのではということになりましたが、大きなサイズで表現してみると、細かいところも誤魔化しがきかないのだなあと思いました。

ここで終了。長塚さんのコメントをうかがいます。以下、コメントの概要です。

- ・ディテールが頭の中に入っていることによって、各工程を体現することができている。
- ・ディテールが入っているの、見ている方は大きい方が分かりやすく面白い。
- ・糸を持って穴をくぐるところは、見えて面白く、大きい動作と細かなリアルさが併存していてよかった。たまに入るリアリズムによって安心できる。
- ・大きなサイズにすることによって作業が分かりやすくなり良いが、演じ方の面白さという観点からは、この大きいものと、実際のスケールとを混在させられないか。サイズを行き来して伸縮する面白さがあると良い。
- ・頭の中で、見えない程の速さで手が動くくらいスピードを速める瞬間があると、「作業を早くする」という工夫が思ってもみない方向に進むと思う

細かな作業手順や使う道具など、話し合いながら確認したことが着実に活かされていて、対象物を大きくすることで分かりやすかったのですが、リアルな大きさと大きなスケールとを混在させるとは……全く考えも付かなかったことです。

表現の手法として、そういった要素があると良いということでしょうか。



平成 30 年 3 月 28 日（水）～30 日（金）

### 〈黄表紙ができるまで・まとめ〉

最後に、この試みについて、おひとりおひとりから感想をうかがってゆきました。

四本の彫刻刀がついた道具を生み出した八十田さんは、まずひとこと「大変な作業ですね」。「普段芝居でドラマチックなことを考えているけれども、（黄表紙をつくる作業というのは）この大勢のひとたちが関わっていること自体がドラマ」と、俳優さんならではの観点から感想を言ってくださいました。

引間さんも、「大変な作業。」と実感のこもったひとこと。「自分たちが小さくなって、本が大きくなったからこそ大変なのがわかった。職人たちは丁寧な仕事をしていたなあ」と。

作者も兼ねた菅原さんは、「全員でする作業があるのは面白いけど、それぞれ違う作業をしていて、それが同時に見える瞬間があっても面白かったのでは。彫りと刷りを隣同士でするみたいなの。」とのご提案。

高木さんは「最後巨大本の方になっちゃったけど、もう一回元の大きさに戻る瞬間があっても良かった」と、やはり大きさのことを気にしておられます。それを受けた長塚さんから、見ている方は大きい方が面白かったし、誤魔化せない領域だったとコメントが。

同じく大きさについて言及されたのは成さん。「（作業にめりはりをつけるために）時間を飛ばす方法があればよいけど、タイミングを共有していないと難しい。想定しているサイズ感が人によってまちまちなので、やっているうちに、一回小さくなった瞬間があった」と指摘されました。そして「そのまま小さくすることも頭によぎったけれども難しかった。本が小さくなるタイミングがあっても良いが、方法は色々ある。ぱっと小さくなるのも、徐々に小さくなるのも。小さいのを全員で作業するのもあっても良いかもしれない。」と、時間や大きさを如何に効果的に設定するかということについて考えられたようです。また、「（大きくなった時に）刷り上がったのを見るのには持ち上げて下から見しかないのかな」という問いには、入口教授から「めくって見るのもありですね」と新しい動きの提案が。長塚さんも、「あそこがひとつの感動の場面だった」と思い返しておられました。

李さんは、ご自身が昔好きだった絵本を思い出されたようです。「一ページに工場の全部の工程が描かれている作品で、部屋によってシーンとしていたり、湯気が出ていたり……それを見て回っているわくわく感、高揚感を思い出しました」と語って下さいました。

また、藤間さんからは「今の生活では電子書籍を見ることもあるけど、黄表紙は作られる

平成 30 年 3 月 28 日（水）～30 日（金）

までに大勢の人が関わっていて、職人たちのちょっと会話とかがあって、暖かい感じがする」という感想が。確かに、ひとつの工程に出てくる職人達のキャラクターが多用でとても面白く、ちょっとその職場に行ってみたいような気持ちがしました。

坂本さんからは、「彫るとかにしてにしても適当にするんじゃないくて、教えてもらってちゃんとそのやり方をわかってすると、作業をしながら今の言葉で喋っていても、洒落とかは昔と同じところがあるだろうし、なんだか昔に居るみたいな気持ちになることもある」という、実感が伴った感想をうかがいました。長塚さんもそれを受けて「具体的な動きを共有しているから、今の言葉が飛び交っていて、「ベストセラー」のような言葉が出てきても大丈夫。もっと本の大きさや中身まで共有したら、相当自由度が高くて大丈夫だと思う。たまたまいにしても、6人着物で3人とび職みたいな恰好でも気にならないのでは。これって結構難しいこと。今日は2人着物が入っているけど<sup>11</sup>、すごく効果があった。たとえば丁稚役の藤間さんが着物で、最初に先生のところに来るシーンは、他の人がジャージでも、江戸の町を走って行ったのは着物の小僧だってことになる。視覚の効果が大きい。」とコメント。

言葉や姿を江戸時代のそれに寄せてゆくのかどうか、という問題は、黄表紙を題材にする<sup>11</sup>と決まった時から何度か話題になっていました。長塚さんも参加して下さった皆さんも、テクニカルな部分を含めて手応えを感じられたようでした。

そして我々国文研の教員からも、感想を述べました。

私は、「黄表紙を作る」という行為が、実感を伴って理解できたという感動でいっぱいでした。大きな本を綴じる時に紙をちょっと持ち上げるところなどは、自分でもやったことがあるだけに、小人になったみなさんの身体表現が面白く、純粋に感激しました。また、職人の描写も面白かったのですが、「職人はずるけるもの」という定型表現があるので、全員が真面目な職人ではなくても良いのでは、という意見を述べたところ、長塚さんから、「「なまける職人」というのも、完全に工程が頭の中に入ればできると思うし、一人位そういう人がいた方が良い。特に拡大した時は、「絶対この作業手伝って欲しい」というポイントで動かない人がいると面白いと思う」と、今後の可能性についてのコメントをいただきました。

版本の構成や作り方について、詳細なレクチャーをして下さった入口先生は、「ここ数年本を分解して再生する授業をしている。そうすると道具のことや手順について考えざるを得ない。今回はそれが視覚化されていた」と、ご自身の授業での取り組みについて触れながら感想を述べて下さいました。また、「研究者は頭の中で本のことを分解して考えているけど、頭でっかちだと（今回のような視覚化は）できない。結局本当のことは分からないので想像でしかないけど、視覚化をしなくてはならないから、目的のための発想ができる。具

<sup>11</sup> 試みとして、このときは高木さんと藤間さんが浴衣姿で参加しておられました。

平成 30 年 3 月 28 日（水）～30 日（金）

体化できる」と、具体的に思考を行った時間が印象的だったそうです。長塚さんは、入口先生が提案された「紙を折るときに牛乳瓶の底を使う」という話がとても具体的で面白く、是非取り入れたいと仰っておいででした。

また、この試みを見守っておられた恋田知子先生（当館助教）は「頭の中で考えていることを、こうやって具体化するんだということがよくわかった。実際やって見ることが大事で、教育の現場でも取り入れることができるのでは」と考えられたそう。また、「中世よりも近世だと手がかりがあつていいなと改めて思いました」と、中世の文学がご専門の恋田先生ならではの感想も。

長塚さんはそれを受けて、古典籍の時間軸を辿るにあたり、写本か刊本か、という選択で悩んだことを述べられました。「写本を辿るとどんどん奥に行くし、個人的なことに行き着くかもしれない。刊本とはドラマが違う。仕事がなくでたら写本を作っている公家の話<sup>12</sup>は面白くて是非やりたいと思ったけど、どこまで我々の肉体がその時代に追いつけるのかという問題があつた。江戸だとなんとなく手掛かりがあつて想像できるので、黄表紙から始めることにした」とのこと。今回は様々な資料をつなぎ合わせて具体的な工程や道具について議論し、想像を膨らませました。写本の時間軸を辿ろうとすると、また違うみちのりになるかもしれません。

さて、いよいよ 3 日間にわたるワークショップもお開きです。

長塚さんからは、「和本や作品自体のことだけでなく、図書館のことや本を読むということについても、色々なことをやってみて、結論をだそうというよりも、要素を出してもらいました」とまとめのコメントがありました。さらに、「この要素を元にワークショップを重ね、3 月位までの間に、すごく短いものでも 30 分弱位のものでも、上演できるものをつくりたい。本ってなんかおもしろいなって思えるようなものになったらいいなと思います」と、今後の抱負も語っていただきました。

### 〈感想〉

今回のワークショップに参加して、「黄表紙」という「もの」は、実在した多くの人の手によって作られてここにあるのだなあということを実感しました。様々な工程を「自分たちがやるとしたら」とひとつずつ検証し、それが身体表現として視覚化されたことによって、自分たちと同じ人間の営みのひとつとして、眼前に示されたような気がしました。

また、表現の手法の多様さに驚かされました。「拡大」「縮小」「リンクする」「元へ戻る」……皆さんの使う言語は初めて聞くものが多かったのですが、中に入らせていただき、一緒に試行錯誤したことで、なんだかコツのようなものがつかめたところがあり、やはり全

---

<sup>12</sup> 江戸時代の豪華な嫁入り本などは、仕事がない公家が収入のために作っているものもあるという話をうけて。

平成 30 年 3 月 28 日（水）～30 日（金）

く分からない文脈もありました。驚きの連続で、身体と頭を目一杯に使った濃厚な 3 日間でした。

長塚さんたちのアプローチによって、単なる知識にとどまらない、とても豊かな「ドラマ」が取り出されたことに驚き、今後の取り組みに大きな可能性を感じています。

次回はこの「要素」をふまえてどのように展開されるのか。長塚さんの構想、皆さんの発想がとても楽しみです。